

教員養成系大学における人材育成の視点から考える音楽科教育と地域連携

－学生の「教員に求められる資質」形成につなげるために－

Music Education in the University of Education with the cooperation of the local community culture

－to build the student's ability for teacher－

山本 美紀

Miki Yamamoto

I. はじめに

平成23年度から25年度にかけて、筆者は「学校・文化施設による〈持続可能な地域文化力〉を育む『連携型プログラム』の開発研究」を行ってきた（化学研究補助金基盤B 2330234）。「連携型教育プログラム」とは、学校と多様な文化施設とがふさわしい形で連動し、〈持続可能な地域文化力〉を高めることに寄与する芸術教育プログラムをさし、本研究の目的は、学校と地域のコンサートホールなどの文化施設や、地域で活動する演奏団体などとの連携によって、子どもたちへの教育のみならず、地域の文化力育成につなげていくことであった。

この研究に取り組みたいと思うようになったきっかけは、義務教育課程において音楽科があり、その中でクラシック音楽をはじめとした様々な音楽に触れるにもかかわらず、多くの児童生徒は義務教育が終わると、自分からコンサートホールに足を運ぶことはあまりしないという状況をいつも不思議に思っていたからである。

このことが表しているのは、学校教育課程における音楽科教育が、様々な音楽や音楽活動に触れる重要な入り口となる役割を果たしているが、それが音楽の美しさや奥深さを感じ知る喜びや、音楽がある生活そのものへのあこがれにつながっていないからだと思われる。つまり、音楽科で音楽について学ぶ内容の必要性が、自分たちの表現やコミュニケーションの1つとしての必要性につながっていない、ということである。これは、コンサートホールが本来は地域住民の生活のうらおいや、豊かな人生のために作られたにもかかわらず、その必要性を住民に十分理解されてこなかったというのと、実は通じるところがある。この事が、それぞれ別の問題としてみなされている限り、子どもたちが生涯にわたって主体的な芸術作品の享受をし、必要なぐさめや活力を得て潤いある豊かな人生を歩むことも、さらに地域文化の担い手となっていく機会も極めて限定されていくにちがいない。なぜなら、生涯において芸術文化活動を主体的に享受するためには、多くの場合自ら出かけていくのが普通であって、「あちらから自分のいる場所に来てくれる」ということはほとんどないからだ。だからこそ、学校教育期間内に「ホールに行って音楽を聴く」体験は、人生にわたって音楽文化を享受するための基盤となるのである。

そのためには、まず音楽に関わる体験が興味深く、楽しいということ、そして何よりも「自分に関わることなのだ」という思いを子どもたちが得る事が必要である。そのためにどのようにすればよいか、そこから本研究の具体的な構想が始まっている。

このように、本研究の目的は、

①子どもたちが生涯にわたって芸術文化活動を主体的に享受し、恩恵を得ていくための基盤づくり、そのための子どもの音楽体験の広がりや、教育現場の連携力の強化

であるが、同時に、

②教員養成課程を持つ大学の、学生の訓練

③コンサートホールを初めとした文化施設や、地域の芸術家や芸術団体の教育力向上による地域貢献

などの方向性も持ち、これらの研究が進んでいくことで、これからの音楽科教育が地域の文化力を直接的に高めていくための方策ともなりうる考えたのである。

これまでの研究成果としては、主として①③の方向から、すでにいくつかの論文を発表してきたが、本稿では視点を変えて②の方向性から成果を見直し、さらに夏以降から始めている、本学人間教育学部学生による地域のコンサートホールなど文化施設でのボランティア活動について、考察を加えようとするものである。なぜなら、一連の研究過程で行ってきたコンサート運営は、教員養成課程に在学する学生によって為されることもあり「新たな時代に向けた教員養成の改善方策について（教職員養成審議会・第1次答申）（平成9年7月 教職員養成審議会）の内容に応答する部分が少なくないからである。

教員養成課程の教育内容の問題点の指摘において、本研究が対応するか所をあげると、「1）教員に対する社会的要請と教職課程の教育内容の実態との乖離 ○子どもたちはもとより、上司や同僚教員、保護者や地域住民などと良好な人間関係を形成・維持することができない若い教員が増えているのではないか。」「3）不十分な教育内容・方法 ○『子どもたちへの教育』につながるという視点が乏しいのではないか。」¹⁾という部分があてはまる。

1) の指摘については、大学側が様々な関係性を保っている組織に身を置く機会を、学生に積極的に与えていく努力が必要である。特に本学の学生は、初年度ということもあり、なかなか自分に近い年長者のイメージを持つことが難しい。学内でも、依然として高校生としての自己イメージから抜け出ることができない上に、社会からいったいどのようなことを求められているのか、具体的なイメージを持つことができず、将来に不安を持っている学生も多い。3) の指摘については、教科教育法（指導法）を教えるだけでは、もはや社会的には大学教育として十分とは認められないことを、大学教員側がこれまで以上に認識する必要がある。つまり、現代の子どもや保護者・地域といった、子どもと学校をめぐる環境を考慮することなしに、大学で学んだ内容が現場で生きることがないということである。これは「現場を知っているから」というだけで、できるものでもない。経験は重要だが、豊富な経験が「思い込み」につながる場合も少なからずある。教師も子どももみな人間である以上、教師Aがやった方法がうまく機能する保証は全くなく、むしろ1つの目安に過ぎないという冷静な判断も必要だ。そこにもやはり、具体的な子どもと保護者との関係性、地域における子育て支援や教育の状況など、バリエーション豊かな実態を知る必要がある。教育実習時に大きなショックを受ける、あるいは新任の教師になったとたんに関心し、退職してしまうことを防ぐためにも、学生たちが自分で自身の得意とする部分を様々な機会をとらえて見つけ、それを自身の教員としての資質の中に位置づけていくことが何よりも大切である。

上記のような指摘から、「(2) 教育内容を改善するための基本的視点」が設定されており、同じく、本研究に該当する部分を抜粋すると、以下のようなものである。

(2) 教育内容を改善するための基本的視点

1) 今日求められる資質能力の形成を促進する視点

(a) 地球的視野に立って行動するための資質能力

教員を志願する者自身に思いやりの心やボランティア精神を適切に身に付けさせることがきわめて大切で

ある

(b) 変化の時代を生きる資質能力

第一は、創造力や応用力などに裏付けられた課題解決能力、さらにはそれを生涯にわたり高めていくことのできる自己教育力

第二に、人間関係を円滑に保つ能力が重要である。子どもたちはもとより、上司や同僚教員、保護者や地域住民などと良好な人間関係を形成・維持することは、教員が職務を円滑に遂行する上で極めて重要である。- 中略 - 通常の友人関係と異なった環境に身を置き、様々な状況にある人々とふれあうことにより、人間関係の本質を学ぶ貴重な機会が得られる

本稿においては、現在本学学生によって行われている活動に至る、筆者のこれまでの研究と共に、実際の文化施設におけるボランティアがどのようなものであり、さらにそこでどのような力が必要とされているのか、教員養成系大学の教育課題として提示する。さらには、このような主体的な地域連携を通して、学生の資質能力の向上に資する教育の方向性を示したい。

II. 「大学・学校・地域」3者連携の先行事例：これまでの研究より

連携型教育プログラムの開発にあたり、「連携にふさわしいコンテンツ作成」は重要な課題であった。ふさわしいコンテンツがあり、それが学校のカリキュラムに活かしやすく「パッケージ化されている事」は、変更が難しい学校現場の年間スケジュールにおいてこれまで十分な検討が進んでいないと考えていたからだ。そこで、パッケージ化するために、英国で成功している連携型教育プログラムとパッケージの基本的構造を参考にし、コンテンツをめぐって1. 事前指導→2. ホールにおけるコンサート→3. 事後指導 の3つの段階を経ての作品理解、さらに主体的な享受体験ができることを目指した。もちろん、その形に必要以上の固執はせず、それぞれ実験校や園の都合に合わせて柔軟に組み合わせる方法をとった。

i. 大学、岡山県N小学校、地域の文化施設

岡山県N小学校の事例は、最も理想に近い形で実施できたものである。折しも、当該校は岡山県の音楽教育研究会の当番校にあたっており、研究に小学校側も熱心に協力して下さった。1. の事前指導では、コンサートに何らかの関係のある内容を扱うが、それがN小学校でのダンスや作曲の授業として行われた。音楽自体を身近に感じられるようなことについて学んだり、コンサートでの内容理解の助けとなる事柄を学んだりすることで、内容を自分に引き寄せることを体験する。2. のホールでの活動は、岡山県立美術館ホールでのコンサート体験が相当する。コンサートでは、詳しい解説には踏み込まず、事前授業で行った内容を想起させる進行役(MC)にとどまる。また、3. の事後指導は子どもの発達段階に応じた、それぞれの振り返りで、一過性のイベントから一歩進んだ音楽体験の位置づけを目指すものである。N小学校の場合はアンケート調査の形をとり、アンケートに答えながら、コンサートの体験をふりかえる機会をもった。

この3つの段階で重要なのは、もちろん2の「コンサートホールに出かけて行って聴く」という部分の体験の充実である。これにより子どもたちは、ホールの中で行われている芸術活動に加え、ホールの中での営みや、動線など基本的に「場を知り、慣れる(近しいものとする)」という、中に入ってみなければできない経験を積むことができる。この経験が、子どもたちの将来へつながる芸術の主体的享受の背景として非常に重要である。

次に、実施されたプログラムの子どもたちを含めた全体像についてである。今回とりあげた音楽作品中村滋延作曲《弦楽四重奏 悲しみの島—ソヴァンマチャ》は、現代に生きる作曲家による現代音楽（コンテンポラリー）であり、完全な無調音楽や電子音楽ではないが、抽象性の高い作品である。そこで、聴覚に頼るだけでなく、ダンスや映像によって視覚や体を使って作品アプローチの窓を開けて行くという狙いがあり、最終的にはダンス・映像を取り入れた複合芸術作品となった。このこと自体は、副産物と言えよう。

しかし、ダンスや映像を取り入れたからと言って、すぐにわかりやすい作品になる、というほど単純なものでもない。「わかりやすい」から「優れた芸術」となるものでないの言うまでもないが、「優れた芸術」の前提に、観客に肯定的にせよ否定的にせよ、まず「受けとめられる」ことがあることは忘れてはいけない原則である。

そこで、小学校での事前授業では、抽象性の高い作品へのアプローチを可能にするために、できるだけそこで表現されている内容が理解しやすくなることを目指した。

【事前授業第1回：レクチャーとワークショップ】

対象学年：第3学年

時間：音楽科授業時間を利用した1時限分（45分）

内容：音楽の背景となった物語についてのレクチャーとダンスのワークショップ

担当実施者：奥祥子

テーマ：「ダンスはどんなふうにもまれるの？」…音楽から生まれるダンス

1. ダンスって何？：ダンスを考える時、例えばどんなふうにも考えるのか、という視点から、ダンサーからゲーム形式でどんどん表現させていく。
2. みんなで表現してみよう！ 曲目（教科書の鑑賞教材から）：アルルの女、この時には、物語性があり、リズムが際立っていてわかり易いビゼー作曲「アルルの女」より《ファランドール》を使いながら、曲に合わせての表現を考えていった。

<全体的な流れ>

- I. はじめに自己紹介（3分）
- II. レクチャー（10分）
 1. インドの昔話「ラーマヤナ」と「ももたろう」
 - ①全体のあらすじ
 - ②登場人物について
 - ③ももたろうとの関係
 - ④『ラーマヤナ』より「ソヴァンマチャ」
- III. ワークショップ：音楽とダンスについて

【事前授業第2回：レクチャー】

「ももたろう」が、岡山では特別な民話であることは周知のことである。そこでまず、事前授業では「ももたろう」をきっかけに、音楽の背景にある物語が、インドやアジア共通の民話と関連性があることなどを説明しつつ、子どもたちの理解に近づけていくようにした。

対象学年：4・5年生（4年生：男4+女=9名 5年生：男12+女5=17名）

このうち、4年生の児童が、3年次の3学期にダンスのワークショップを受講。

時間：音楽科授業時間を利用した1時限分（45分）

内容：作曲者による作品理解のためのレクチャー

担当実施者：中村 滋延（作曲者・九州大学芸術工学院教授）

テーマ：音楽を「感じる」「創る」のワークショップ

<全体的な流れ>

- I. はじめに自己紹介（5分）
- II. レクチャー（20分）
 1. 物語から作曲する
 2. 音楽と表現 《ソヴァンマチャ》
 - ①音楽で表現できること
 - ②《ソヴァンマチャ》について
 3. 音楽と映像
 4. 作品についてのQ&A

その後、このような2種類の事前授業を受けた児童を含むN小学校の全児童と保護者が、夏休み期間中に岡山県立美術館の持つホールでのコンサートを聴いた。京都フィルハーモニー室内合奏団のメンバーによる弦楽四重奏のコンサートである。

コンサートは「音楽で表現される喜怒哀楽」をテーマに、弦楽四重奏曲による2部構成になっており、第1部は既存の作品の中でも教科書に掲載されているものなど、それぞれ表現されたものが比較的容易にイメージできる作品を選び、第2部との連結がスムーズになるように組んである。

ここでは、進行役（MC）と会場と客席をつなぐ役割を学生が担当した。担当した学生は、初等教育を専攻する学科学生たちであった。

【コンサート体験】

プログラム（80分）

第I部 弦楽四重奏の演奏

喜びを表現しているもの：アンダソン 《ワルツィングキャット》

怒りを表現しているもの：モーツァルト 《交響曲第25番》

哀しみを表現しているもの：バーバー 《アダージオ》

楽しさ表現しているもの：オッフエンバック 《天国と地獄》

第II部 音楽と映像とダンス

中村滋延 《ソヴァンマチャ》

第III部 楽器紹介・楽器体験

第IV部 弦楽四重奏の演奏

情景を表現しているもの：バルトーク 《トランシルバニアの夕暮れ》

音色を楽しむもの：アンダソン 《プリנקプレנקプランク》

最後に みんなで合奏：アンダソン 《シンクペーテッドクロック》

ちなみに、このコンサートは「社会教育」の枠で学校が設定し、N小学校とPTAが協力（共催）して実現したものである。コンサートは夏休み期間中のお盆休みに入る前日に実施したことから、保護者をはじめ祖父母といった家族や近所の人と子どもたちはコンサートを聴く体験をもったことになる。

【事後指導】

コンサートの終わりに、コンサートの振り返りを短く行い、感想を含んだアンケートは帰宅後書いてもらうようにした。また、夏休みであったため、夏休み明けに担任の先生に提出してもらうことで、事後指導に代わるものとした。「事後指導」とは、その時体験したことや、感じた事柄をふりかえることで、改めて音楽によって心の中に起こされた様々な感情を整理したり、言葉に表すことで自分の心の動き（動かないことも含めて）を認識しなおしたりする、ということを目指している。

また併せて、実施小学校の担当教員によるアンケートも実施した。

ii. 大学、保育園、地域で活躍する演奏団体

次に、研究実践を行ったのは、京都市内の2つの保育園である。研究に際し、今回も京都を本居地に子どものためのコンサートを精力的に展開する京都フィルハーモニー室内合奏団の協力を得た。具体的な実践内容は、以下のとおりである。

①ミニコンサートとワークショップ

コンサートでとりあげられる作品の要素で構成した。この時注意したのは、他の場所でも応用可能な形にするため、できるだけ予算も少なく、相手方の要望に応えやすい小回りの利く形にすることであった。予算的なことではコンサートでは室内楽オーケストラで弾くことになる作品を、ヴァイオリン1本でやれるということ。これには、奏者の能力と共に、適切な編曲があるということが重要である。次に、人的なこととして、子どもにふさわしい声掛けができる、優しい口調で話しかけることができる演奏者がいるということ。この場合は対象年齢と同年齢の2人の子どもがいる奏者であり、自身が自分の子どもの通う幼稚園で、子ども対象のミニコンサートを開いた経験を持っていた。そのため、何よりも演奏にあたって、子どもたちがそれぞれの作品のイメージを持ちやすいように小道具を既製品や手作り品で用意し、話し方や小道具の活用など工夫がされていた点は重要であった。

②ワークショップ後のお絵かき

事後指導の代わりに、保育園児には音楽を聴いて印象に残ったことや、うかんだ事柄について絵で書いてもらうというものである。これは、幼児の発達段階を考慮して、演奏を聴いた直後に書いてもらうようにした。しかし、この点での課題は、私たちの説明力にある。なぜなら、園の方針にもよるが、子どもたちに強制して何かをさせないようにしている園や、子どもたちが大人の期待通りに描かない場合の不安を強く持たれるなどの場合があるからだ。あくまでも日々の「お絵かき」の一環として、子どもたちには自由に書いてもらい、必要以上の声掛けは不要であること。また何の関連もない絵を描かれても、全く問題がないこととお話した。実際このようなことから、大人にとって「音楽を聴いて何かを感じる」ということ自体が、かなり構えることであるということが、改めて確認できた副産物である。

③コンサートを聴きに行く

ミニコンサートを体験した子どもたちの中から、希望者のみを実験であること、アンケートを後で書いていただくことなどをお願いしたうえで、2園で親子20組を招待した。一連のワークショップとコンサートでは、保育担当者と保護者アンケートを行い、園・家庭での子どもたちの遊びや様子の変化がみられるかどうか、大人から見た内容を書きとめてもらった。

iii. その他の事例

他にも、一連の研究では、大阪教育大学寺尾教授の協力により、大学生を柏原市内の小学校に派遣し、小学生のコンサート出演と鑑賞を目的とした実験を行った。活動の内容は、音楽の授業で音取りの補助、ピアノ伴奏、パート練習の指導、発声方法やステージ上でのマナーに関するアドバイスなどである。

ここでは、音楽を専門とする学生が、音楽科授業時間数の減少により取り組みが困難になりつつある、全学年参加の文化祭における「合唱」に際し、音楽専科教員の補助的役割を担うことで、負担の軽減が果たされたことが報告されている。何より、児童自身が、専門的なアドバイスによる発声方法の習得や、授業とは異なる練習方法での技術習得によって、表現力が向上したことを実感している結果がアンケートから明らかになっている。また、参加学生側も授業に加わるだけでなく、練習の成果を文化祭や卒業式の見学に向いて確認している。教育実習とは異なる立場でのこのような学校との関係性の構築は、学生にとって、学校行事のあり方、音楽鑑賞をより具体的なものとして受け止める機会となったという。

Ⅲ. 本学学生の文化施設における音楽ボランティア活動：

ここで、この夏から始まっている、本学学生による活動について報告する。参加学生は、4月から結成した「音楽サークル」のメンバーを中心に、マーチング学生や、教員を目指している学生などの自由参加である。また、一連のボランティア参加ができるようになったのは、先述の研究以来、協力を得ている京都フィルハーモニー室内合奏団と、同楽団と子どものためのコンサート活動を続けているいくつかの文化施設の尽力による。

京都フィルハーモニー室内合奏団は、子どものためのコンサートを実に40年以上続けてきた固定メンバーによる常設の音楽団体である。実は、このオーケストラの存在がワークショップの成功のカギを握ることである場合が多い。子ども向けの企画に慣れている管弦楽団のメリットは、様々あるが

①子どもの反応（＋－両面において）を、余裕をもって受け止めることができる。

②適切な声掛けができる。

③様々な編成による、豊富な編曲作品をもっている

などがあげられるだろう。特に、本学学生のような、大学に入って1年目で具体的な子どもとのかかわりのイメージが描けない学生にとっては、京都フィルハーモニー室内合奏団のプロの演奏家が、どのように大勢の子どもたちと会場で一度にコンタクトをとっているのか、あるいは、音楽の伝え方がどうなっているのかなどについて、具体的なイメージを持つために非常に有効である。

本学学生が今年度参加したのは、京都フィルハーモニー室内合奏団がバック提供している「うたって！おどって！楽しいね！」というコンサートシリーズである。このコンサートは、八尾市文化会館プリズムホールが中心となって、近隣にあるいくつかの公共ホールが協力して企画を買い上げ、合奏団が各ホールを巡回する形をとるⁱⁱ。参加ホールのうち、本学学生が参加したのは以下の3公演である。

2014年8月30日（土）やまと郡山城ホール 11：30開演

「親と子の管弦楽コンサート 京フィルといっしょ うたって！おどって！
楽しいね！」

*NHK Eテレ『フックブックロー』に平積傑作役で出演中の谷本賢一郎
がゲスト出演

2014年12月6日（土）かしはら万葉ホール 11：30開演

「親と子の管弦楽コンサート 京フィルといっしょ うたって！おどって！
楽しいね！」

2014年12月14日（日）八尾プリズムホール 午前の部：11：00開演 午後の
部：14：00開演

「親と子のはじめてのクラシック体験 うたって！おどって！楽しいね！」



図1：チラシ

いずれも0歳からの入場が可能で、プログラム内では子どもたちがあらかじめ作ってきた「手作り楽器」を使って、出演者と共演する「参加型」の部分もある。さらに、各公演後には「楽器体験コーナー」がロビーに設けられており、参加した子どもたちは、出演者の手ほどきで、楽器演奏の体験ができる。

公演に際しての学生たちの役割は、

- ①公演前：パンフレット等の挟み込み
- ②公演前：会場飾り付けの補助
- ③開場後：チケットもぎり
- ④開場後：ベビーカーの誘導・整理
- ⑤開場後：座席誘導と子ども用補助シートの手渡し
- ⑥開場後：遅刻者の誘導



写真1：チラシ挟み込み



写真2：会場整備（14.12.06）



写真3：スタッフミーティング（14.12.14）

⑦開場後：手作り楽器を持参していない子どもたちへの楽器配布

⑧開演中：参加型プログラムの模範演奏

など、多岐にわたる。しかし、公演中の学生は上記の働きをしているものの、基本的にはコンサートを鑑賞することが許されている。そのため、幼児から初等教育対象者の具体的な発達段階の違いと共に、子どもたちが音楽と関われる程度の違いの認識、演奏家と子どもたちとのやりとりなどが客観的に見学・体験できるようになっている。さらに、本公演が保護者同伴であるため、学校では見ることができない、保護者との日常的な関わり的一端を、自分たちがケアに携わらなくてもよい分、余裕をもって見ることが可能になっている。



写真4：チケットもぎり (14.12.06)



写真5：写真撮影



写真6：子どもと保護者と (14.12.06)



写真7：子ども用補助シート渡し (14.12.06)



写真8：手作り楽器渡し (14.12.14)



写真9：奈良学園参加の看板 (14.12.14)

IV. おわりに

昨年4月に高等教育政策研究所が発表した「国立大学教員養成系大学・学部において優れた取組をしている大学教員に関する調査」の結果をみると、非常に興味深いことが書かれている。「(1) 教員養成担当の大学教員に求められる資質・能力」においては、「教員養成担当者としての自覚」「授業のデザイン」「学生とのコミュニケーション」-中略-「同僚とのコミュニケーション」などずらりと並んでいるが、これは言葉を変えただけで、ほとんど内容は教師に必要とされる資質能力と一緒なのである。さらに、「(2) 教員養成担当の大学教員のリアリティ・ショック」の項では、「リアリティ・ショックそのものが」「特定の時期のその職業の性格を特徴づけている」としている。そこに比較としてあげられているのが小中高特別支援学校教員なのであるが、そこには「仕事量の多さ」「子どもの能力差の多さ」「管理・統制のきつさ」「世間の目の冷たさ」などあり、これらもまた、実は大学の教員も昨今急速に感じつつあるものであるⁱⁱⁱ。このことは、実際に学生たちと共にボランティアなど地域に出て行った時に、はっきりと自覚できる。

学生たちを地域に送り出すのは、野放図にすることではないのは言うまでもない。そのためには日ごろの指導や、マナーや一般的な常識を改めて確認し、教えることが必要であり、その部分で学生がボランティア受け入れ側より叱責を受けたとしたら、教員の指導不足であると言わざるを得ない。何より、本学の学生はまだ10代であり、「大人の目に社会人予備軍としてさらされる」ことに慣れていない。自分たちのふだんの何気ない言動や態度、服装が、子どもや保護者、市民ボランティアで働く方たち、受け入れ側の施設の職員の方々などにどのように受け止められるか、またそれが働く場でどのように作用するか、という点ではほとんど経験がないのである。一方で、学生を受け入れる側もすべてのことを大学が教え込んで来ているなどと、期待しているわけではなく、むしろ、次世代の地域社会を担う人材として、積極的に大学と教育していこうという意志を持っていることが多い。そのような思いを共有し、共に1人の人間を育てている、という意識がお互いに確認できるよう、まず大学教員側が協働の姿勢と、学生にどのような体験や学びをさせたいか、相手方にわかるように説明し、具体的な方向性を見せる、あるいは相手側と話し合いを持つ必要がある。

本学学生の地域の公共ホールにおけるボランティア活動は、まだ始まったばかりであり、指導している筆者自身が、地域の公共ホールと話し合いながら、学生が担当できる範囲を広げ、学生自身の力につながるものとなるよう努力している最中である。実際、冒頭の「(2) 教育内容を改善するための基本的視点」として挙げられているいくつかの項目に、ボランティア内での活動が、実際にどのように役立っているかを示すと、以下のようになる。

1) 今日求められる資質能力の形成を促進する視点

(a) 地球的視野に立って行動するための資質能力

教員を志願する者自身に思いやりの心やボランティア精神を適切に身に付けさせることがきわめて大切である

→公共ホールの役割の認識や、地域の子育て支援事業の実情の把握。地域のボランティアやサポーターと実際に共働することで、違う世代や背景を持つ人々との交流が達成され、「ボランティア精神」の具体とバリエーションを知ることができる。

(b) 変化の時代を生きる資質能力

第一は、創造力や応用力などに裏付けられた課題解決能力、さらにはそれを生涯にわたり高めていくことのできる自己教育力

→これまで「コンサート」をはじめ、地域の文化イベントなどに自主的に参加したことがない学生が、この活動を通じて初めて「地域コミュニティ」で展開されている文化活動に触れる機会を得ている。これは、学生が教師になってからも、専門知識を得たり、より深く充実した文化体験をしたりすることを可能にし、それらを通して創造力や応用力が発揮された具体的なイメージを持つことが出来る。「創造力」はゼロから起こるものではなく、たいていが、優れたモデルのいくつかを知ることを通して、それらを自分のものとして消化していくことから始まるものである。引出の多さが、創造の質と量を保障する。

第二に、人間関係を円滑に保つ能力が重要である。子どもたちはもとより、上司や同僚教員、保護者や地域住民などと良好な人間関係を形成・維持することは、教員が職務を円滑に遂行する上で極めて重要である。- 中略 - 通常の友人関係と異なった環境に身を置き、様々な状況にある人々とふれあうことにより、人間関係の本質を学ぶ貴重な機会が得られる

→実際、学生はこの活動を通じて、多くの場に身を置き、人と接している。地域による違いや、スタッフの働き方の違い、親子関係の様々な具体的な事例に触れてもいる。さらに、同じコンサート内容で異なった地域の状況を見ることから、地域間の様々な違いも実感している。ホールに務める若い担当者からは、公務員としての働き方などの話も聞いているようである。これらの活動は、教育実習に行く前に、子どもたちや保護者を具体的にイメージするのに役立つと考えられる。また、一連のコンサートが、保護者同伴で行われるものであることから、学生たちにとっては、子どもの世話に追われることなく、余裕をもって、客観的に幼児から中学年程度までの様々な年代の子どもの様子を見られる機会となっている。

地域で行われている文化活動に参加することを通して、他のボランティアスタッフの実際に触れることもでき、自分との考え方の違いや、受け止めの違いを肌身で感じているようである。

一方で、一連の活動を通して現時点であげられる課題は、以下のようなものである。

- 1) 子どもの発達段階の認知とそれに応じた接し方
- 2) 手遊びなどを始めとした、子どもと関わる際のきかけの作り方
- 3) 外部連携の際に、相手方と確認し抑えるべき点と方法
- 4) 活動している際の、他のスタッフとのコミュニケーション

1) 2) については、「これからだろう」という意見もあるだろうが、外部連携の際にはすでに先方から期待されている内容である。しかし、これを「教育実習に行ってからだ」というのでは遅い。例えば、1) については、すでに発達心理を学んでいるわけであり、そこでの学びの内容が、子どもと接している際に目の間で起こっている状況と学生自身がつなげることができように、学生たちへの気づきを促すことが必要である。また、「教育学部の学生を受け入れる」ということで、連携先は「子どもと接するのが得意」で、すぐに「手遊び」や「子どもと楽しく遊ぶことができる」と思い込んでいる場合もある。実際、コンサートの前に早く来た子どもを相手に、舞台やロビーで子どもを楽しませる小さなコーナーをもってほしい、という要請を受けたこともあった。そのあたりは、現段階では間に立っている教員が調整をする部分ではあるが、学生の直接的な力となる事柄でもあり、大学での演習

内容とつなげながら、最終的には学生たちがそのような場面で日ごろの学びを実際にやってみる機会になるようにしていきたいと考えている。

3) は、将来教員を目指す学生にとっては、教職に就いてから重要なスキルとなる部分である。学校現場で、子どもたちの体験学習やその充実が叫ばれるものの、なかなか難しいのは、教師の多忙さと共に、すべてを自分でやろうとするのも要因の1つと考えられる。外部連携はそれを解決する方法でもあるが、そのためには連携先と打ち合わせたり、地域の人たちと教育目標を共有したり、細かい打合せが際限なく続くイメージがある。しかし、例えばコンサートがどのようなものであるか、あるいはどこを押えておけばよいかがある程度わかっているならば、効率よく話し合いができ、無駄な時間や労力が費やされることも少なくなる。求められる教師の資質の中で「創造的な仕事」をするためにも、他者からの協力の上手な得方や効率のよい仕事のやり方は、重要なスキルである。

4) についての課題は、すべての課題にも通底するものである。学生たちは、初めてのボランティア先に行くと、当然自分たちで固まってしまう。もちろん、いろいろな人と関わるようにアドバイスするが、それでは十分ではない。この点は、受け入れ先も言えない部分であるので、教員がまずは率先して連携先のスタッフや、地域の他のボランティアスタッフの方々に積極的に話しかけ、初対面の大人と関わる見本を示す必要がある。これは、学生自身の主体的に関わっていこうとする姿勢にも関わる指導であり、非常に重要なポイントでもあると同時に、実習の初期の段階で学生の多くがつまづく点でもある。実習で学生たちがよく口にするのが、「子どもたちがよってこない（なついてくれない）」「先生たちが教えてくれない」である。大人からすると「自分から行けば（聞きに来れば）よいではないか」ということになるが、学生たちはそれさえ「何かコツか方法があって、それをまわりが教えてくれるはず」と思っているのである。その考えのまま送り出すと、ほっと立っているだけになる。だから最初のボランティアでは、「自分からにっこりわらって、目線を合わせてこんにちは、って言うんだよ」「わからないことがあれば、聞く」ということだけを伝えておく。これだけで、最初は不安そうだった学生も徐々に慣れ、回を追うごとに自分から子どもや保護者に声をかけるようになっていく。「きっかけづくり」も経験をつめば、それぞれの特性を生かしたものに落ち着くことになるので、教員だけでなくボランティアスタッフの方や連携先のスタッフの方々との関わりの中で、彼ら自身が育てていくものであろう。

まだ3回程度の文化施設での活動であるが、再びボランティアスタッフの要請を受ける事例も出てきている。最終的には、学生たちが自分たちで企画し、先方と連携のアレンジができるように育てていきたいと思うが、何よりもボランティアを通して著者自身が、将来の教師像や、教員養成系大学に期待されている事柄の具体的なニーズを知る機会となっている点を強調しておきたい。担当している指導教科の先に、学生たちが将来対峙する児童生徒や保護者の存在を認識することは、教員養成系大学に務める教員に最も必要とされている事柄でもある。「単に専門の知識を習得するだけでなく - 中略 - 『教えることを想定した教科内容の知識』の修得¹⁹⁾を学生たちに得させるために、著者自身が学生たちのボランティアスタッフの過程を、今後も授業にフィードバックさせていくと同時に、分析研究を続けて行こうと考えている。

<参考文献>

教職員養成審議会「新たな時代に向けた教員養成の改善方策について（教職員養成審議会・第1次答申）」（平成9年7月）

高等教育政策研究所「国立大学教員養成系大学・学部において優れた取組をしている大学教員に関する調査」平成26年4月7日

<注>

- i 「新たな時代に向けた教員養成の改善方策について（教職員養成審議会・第1次答申）」（平成9年7月 教職員養成審議会）
- ii 「このコンサートは、八尾プリズムホールの声掛けにより、公共ホールが協力し、クラシックの名曲や本物の楽器の演奏を楽しく聴いて、心ゆたかで元気な子どもたちに育って欲しいと願い、企画・実施しています。」（「親と子のはじめてのクラシック体験 うたって！おどって！楽しいね！」平成26年12月24日コンサートチラシより）
- iii 高等教育政策研究所「国立大学教員養成系大学・学部において優れた取組をしている大学教員に関する調査」平成26年4月7日
- iv 同前 4頁